

# 古今集声点本における形容詞のアクセント

秋 永 一 枝

(本稿のキーワードを次に記す。アクセント・声点・古今集・形容詞・去声)

## 一、序 説

古今集などの文学作品には形容詞に注記された声点が豊富で、その活用形もほぼ揃う。これは、和名抄・名義抄といった辞書類や、四座講式のような声明の資料などとは異なった、文学作品ならではの現象である。

ここでは、古今集を中心に、顕昭差声と思われる京大本「後拾遺抄注」<sup>(1)</sup>・天理本「散(木集注)」<sup>(2)</sup>・旧有栖川本「袖(中抄)」<sup>(3)</sup>等も援用して、院政期から鎌倉期における形容詞のアクセント体系を組立ててみようと思う。尚、室町以降の伝授による声点本は、相伝本の声点以外に変化型アを多く含むため、原則として取り上げないこととした。(以下、<sup>(4)</sup>内は省略する)

「体言のア」の際にも述べたように、古今集にアの注記された時代は、院政期から室町、更には江戸期にまで及んでいる。当然古いア型もあれば新しい変化型も現われている。名義抄にみられ

る去声点が、古今集の和語にはみられないとして新しい体系であるかのように理解される方々もあるが、形容詞などに稀にみられる去声は特記すべきことであろう。

形容詞の去声点が本来の去声であるか否かを見極める手掛りとして、古今集における去声点注記について簡単にのべておきたい。まず真名序その他、漢字の部分には去声点が多くみられるが、仮名書の部分に去声注記のものはたしかに数少ない。このうち、誤点でないものをあげると、左のようなものがみられる。

卷十九101の「えふ(の身なれば)」には、定家本その他に「去上」<sup>(5)</sup>(以下、双点はゴチックとする)が差されるが、これは既に記したように字音語「間浮」を○●●型と推定しての注記で、まだ和語化してないものと考ええる。

卷三四の「将」<sup>(6)</sup>には、「古今」問答「が(去上)」を差すが、これは恐らく●型であること既に述べた。

同じく「問答」の卷十47「やまし(植物名)」には「平平去」が

注記される。「やまし」は「山羊蹄」が語源であろうし、「し」(「ぎしぎし」の古名)には「伊(勢)廿(巻本)和名」(十七21ウ)で去声注記があることから、「問答」は「山」(平平)「+」(去)の複合アを注記したもので、「問答」における去声は信頼するに足ることが分る。この系統が「永(治二年本)・寂(惠本)・訓(点抄)」の(平平上)注記、「梅(沢家本)」の(平平上)注記へと変化したものであろう。

「永」の121(739) b 「汝かぬし」(去上平上)における去声は、これが清輔本系統にみられる異本歌であること、「(日本書紀)」が大部分上声で稀に平声を注記することなどから、古くは「汝」は去声であつたらうとかつて述べた。

その他、次のように動詞で一箇所、形容詞で三箇所去声点がみられる。

卷十42 「問答」 うくひす(とのみ) (去平去平)

卷十三619 「寂」 ヨルヘナミ(へ上上上去平) (頭注・墨点)

(本文は「よるへなみ」(へ上上上去平) 朱点)

卷十五805 「永」 いとなかるらむ(平平去) (朱点)

「寂」 いとな(へ上平去) (いと) (なかるらむ) (平平上平上) (傍注に墨声点)

初めの「憂く干す」は物名「うくひす」を隠し、「す」は未然形につくから、動詞「干」の去声は未然形の「ア」としてよい。

金田一春彦氏によれば、連用形・終止形一拍の動詞には、「名義」・「四座(講式)」の時代ともにA B二つの型しかなく、「四座」時代の未然形はともに●型とされる。だが、古くは「ひ」の去声

○●型を、B型未然形に認められないだろうか。

動詞に関しては別稿とするが、形容詞では「憂く」「無み」の語頭の去声を認めてもよいと思う。「問答」は先にも述べたように「將」の語頭に去声があり、声点も正確な善本である。問者の方が答者よりアには詳しく、その発音を聞いて筆録者が差声したもののようである。後世多発する去声位置の声点とは異なる、本来の去声点と考えたい。

「寂」もまた古い声点本の移点がみられるもので、このうち「清」とあるものは「永」の声点と多く合致すること既に述べた。「よるへなみ」の(へ上上上去平)には「清」の注はないが、片仮名で頭註に記入してあることは、清輔本系統の片仮名本からの写しという可能性が高い。但し、清輔本の断簡によくみられる声点の差声者は不明である。

「辺」は「むかしへ」のように清音もあれば、「寄るへなみ」のような濁音もあるから、「へ」の単点は問題ない。或いは清濁を区別しない差声資料から移点したのかもしれない。また「へ」は○型と推定されるから(へ上上上) (へ上上平) 何れの可能性もある。その上「へ」の声点は、その字形のために(へ上)と(へ平)の加点が分明でないことから誤写も起りやすく、「へ」の点が決め手にはならない。

「なみ」は「無し」の語幹に接尾語「み」がついたもの。終止形「なし」は○●型、連用形・未然形は名義抄の「良く・無く・良からず」等から考えて、古く語幹は○●型であったと推定される。805「いと) (なかるらむ)」は後に述べる。

古今集の差声は院政初め頃までは通ることが可能である。顯輔は寛治四年(一〇九〇)の、俊成は永久二年(一一二四)の、顯昭は大治五年(一一三〇)の、定家は応保二年(一一六二)の出生である。なお、「四座」の明恵上人は承安三年(一一七三)の生れである。古今集に差されたごく古い差声は、「四座」の時代より古く、「図(書案)本名義(抄)」の時代よりは新しい資料といえよう。

次に、終止形の拍数別に形容詞のアクセント体系を考察することにする。

## 二、二拍語

終止形が二拍の形容詞としては、次の七語に声点の注記がみられる。

悪し・憂し・惜し・濃し・疾し・無し・良し(\*はシク活用)のもの。以下同じ)

「昆」の「欲し」と傍注のある声点には問題があり、「多し」の項に送る。その他、古今集の差声者としては重要な位置をしめる顯昭注釈の声点本として、「後拾」に「無し・惜し」が、「袖」に「無し・良し」がみられる。

### (1) 終止形

(i) シク活用のもの

〈平上〉注記

憂し<sup>444</sup> 伏片・家 ↓<sup>(6)</sup>

濃し<sup>444</sup> 昆・訓・梅

疾し<sup>898</sup> 京秘・梅

無し 顯天平<sup>568</sup> \*、伏片・家<sup>443</sup>、永・寂<sup>164</sup>、昆・高貞・

訓<sup>749</sup>、梅<sup>669</sup> ↓<sup>(5)</sup>

良し<sup>692</sup> 梅(平平)も ↓<sup>(3)</sup>

(ii) シク活用のもの

〈平上〉注記

惜し<sup>981</sup> 訓 ↓<sup>(2)</sup>

右の差声のうち、「濃し」は金田一春彦氏が●型と推定されたものである。「観(智院)本名義(抄)」が〈平上〉型であり、現代京都も終止形が●型で「無い・良い」とはちがうアをもつからというのがその理由である。然し、ともに「滋」の訓であるが「鎮(国守国神社)本名義(抄)」は〈平上〉であり、ともに高起式だが確例としたい。(2)以降の活用形からみても鎌倉期は○●型とみて差支えないと思う。平曲では「濃し」は「無し」と同型で、近世まで変化がない。現在京都アの●●型は、他に「酸い」があるが、ともに地域によりコイー・コイー、スイーのあることから、共通語形に直した時に、●●型になったものであろう。

(i)には「行き憂し」と(と)訓<sup>388</sup>〈平上上上上〉(平)があるが、これは〈平上上上(平)〉から、複合した形へと移行しかけた段階ではなかるうか。

(ii)は「…なしに」の場合に次のような異なりがみられる。

いふひとなしに<sup>505</sup> ○○○○上上上 昆・高貞

上上上上上 平 訓

われとはなしに<sup>164</sup> ○○○○上上上 訓・梅

○○○○○上上 伏片  
平上平平平上上 昆

○○○○○平上○ 京秘(我何故と申也)

○○○○○平○ 京秘(我無とてさうへし)

わたるとなしに 749

上上平○平上○ 寂  
○○○○○上上○ 永・梅

ものとはなしに 132

○○○○○上上 伏片  
○○○○○平上 昆

声点は「無し」と同じ《平上》型で、「し」に双点があるのは、「京秘」の注にもあるように、「なしに(何故に)」「解と混同して濁音によんだものであろう。「京秘」は「二の儀侍り」(資料簡)「参照」としているが、「無」の声を《○平○》とするのは、

複合して《平上平平平上上》の形に変化したものと思われる。また「なしに」が《上……》のものは「訓」の「いふ人なしに」の「人」が《上平》でなく《上上》になっていることから考えて、「無し」は形容詞というより前部成素と複合した形に変化してしまっただめと思う。「すべなし」は四拍語に送る。

(4)の「良し」692は、「梅」「月夜よしよ」と「昆」「月ヨ、シヨ、シト」(ヨ、シの傍注に「夜吉」とあり、「夜」は平声であるから「昆」の上声は「月ヨ」の上声にひかれたかと前に書いた。踊り字の上声は、平声の位置のずれであろう。「梅」の《平平》は《平平平》の誤点とは考えられず、複合の強さによるものか。

例の「惜し」は、訓904に「ナレオシシ」《平上平平上》があり、

「汝惜しぞ」と解釈したが疑問とする。  
(2)連用形

(i)ク活用のもののみ

《去平》注記  
憂く(干す) 422 問答

《上平》注記  
憂く(干す) 422

伏片・家・永・伊・高嘉・京中・寂・昆

・京秘・訓・梅

濃く(も) 876

疾く

無く  
伏片 83、伏片 83 (↓「資」)

梅 54 (もかな)

かひなく 1097  
上上上平 昆・高貞「懸詞」

けゝれなく 1097  
平上上平 伏片・顕天片・顕大・寂

良く 485\*  
顕天平

右のほか、「ケ、レナク」1097に「訓」が《平上平上上》を注記するが誤点であろう。ク活用の連用形は「憂く」における「問答」の《去平》から、「伏片」以下の《上上平》に変化したものとみられる。これは左の「紀」や名義抄の《去平》注記から考えて●○型から次第に●○型に移行した様相を如実に示しているところとてよからう。

疾く《去平》 前(田家)本仁徳紀135墨・岡本名義15  
無くもが《去平上平》 観本名義仏下末16(9ウ)

古今集にも「四座」にもシク活用はみられないが、「解脱」(文

義集集記」に「イシク」〈平上平〉があること筑島裕氏の報告があり、金田一氏の推定されるように鎌倉期は○●○型ととってよかるう。

(3) 連体形

(i) ク活用のもの

〈平上〉注記

憂き 毘455、寂・毘・高貞827 ↓(6)

濃き868 梅

無き 顯天平1030、寂957、訓722 1058、梅858

良き711 訓

(ii) シク活用のもの

〈平上上〉注記

悪しき 顯府(4)15 \* ↓(2)

(6) 827の「憂きながら」は「浮きながら」との懸詞で「寂・毘・高貞」ともに〈平上上上〉を注記する。「浮き」は高起式のため、「憂き」の差声と解釈した。尚、「天恵」は傍注に「浮」として〈上上〉を注記し諸本と異なる。久曾伸昇氏の「古今和歌集成立論 研究篇」(36ペ)には「藤原俊成筆御家切」の写真があり、この部分に〈平上上上上〉の差声がなされる。氏によれば仁平三年、俊成四十歳前後のものか? とあり更に頭注などの注記は清輔本によったものと述べておられる。「か」が単点であることから比較的古い差声と思われるが、清輔本にあったものか、俊成の差声かは知るべくもない。ただ、「寂・毘」等の差声は、これらの系統からの移点かと考えられる。

「濃き」は古今では「梅」の一例であるが、終止形・已然形が低起式であり、○●型とみてよいと思う。

(6) は序注の部分に「ナリアシキイテキテ」とあるもの。顯昭注としては、右記の語以外に次の例がみられる。ともに○●○型とみてよかるう。

惜しき〈平上上〉 後拾133

(4) 已然形

(i) ク活用のもののみ

〈平上平〉注記

濃けれ(とも) 450 毘

〈平上〉注記

憂けれ(は) 804 毘・高貞

無けれ(はや) 442 毘

金田一氏は「四座講式の研究」で已然形○●○型に推定マーク\*を付されたが、右の注記から○●○型と認定できる。シク活用の例はないが、他の活用形から考えて、○●○型としてよかるう。

(5) カリ活用

(i) ク活用のもののみ

この中には、二拍の形容詞が単純な形で出ているものは左の一例のみである。

無かりせは465 〈上平平上平〉 伏片

あとは、「起き憂し・つき無し・いと無し・物憂し」の形であり、その中には声点本によって、二拍形容詞としての、或いは四

拍形容詞としての、或いはそのいずれともとれる差声なされて  
いる。そこでこの活用形は拍数にかかわらず、終りに一括して検  
討することにする。

(6) 古未然形「一け」+「く」

古い未然形に「く」が接続した語は、次の三語である。

(i) ク活用のもの

憂けく(に) 954

〈平上平〉永「く」の上声は「け・く」中間の点

〈平上上〉高嘉・伊・京中・寂・梅・毘・高貞

良けく 1052

〈平上平〉天片・伏片・家

〈平上平〉永・毘・高貞・訓

〈平上上〉高嘉・寂 〔平上〇〕訓(又説)

(ii) シク活用のもの

惜しけく(も) 〔平上平上上〕顯天平 568 \*

(i) には〇●型・〇〇型の両様がありそうである。どちらか  
というと、顯昭本系統は〇●型、定家本系統は〇●型で、顯  
昭本の方が古い型かと思われる。最後の「なにそはよけく」の  
「け」の双点は、「毘」の注釈に「ヨケクト云者ソヨクヲ云也」  
とあるところから、そうした解釈と混同して濁音形が生まれたの  
かもしれない。(ii)の「惜しけく」は〇〇●型で問題なからう。

(7) 語幹形

語幹単独で使われるもの、接尾語のつくものなど多様であり、  
体言を作ったものは既に「研究篇上」で述べたことでもある。そ

ここでこの活用形は拍数にかかわらず、一括して検討することにし  
る。

### 三、三拍語

終止形が三拍の形容詞としては、次の四十二語に声点の注記が  
みられる。このうち、「淋し」を「ものさびし」に送ると、四十  
一語となる。

浅し、厚(淳)し、怪し、荒(粗)し、痛し、甚し、薄し、  
美し、多し、同じ、重し、難し、悲し、清し、暗し、苦し、  
如し、賢し、(淋)し、寒し、繁し、親し、白し、涼し、高し、  
猛し、正し、楽し、弛し、近し、長し、憎し、妬し、早(速)  
し、久し、古し、正し、未し、間無し、空し、弥し、弱し、  
佗し

「四座講式の研究」では二十二語が上げられており、顯昭注の  
「散で二語、「後拾」で一語、「袖」で約十語あるので、これと重  
複する語も多い。それぞれの資料の性格を考えながら分析するこ  
とにする。

(1) 終止形

(i) ク活用のもの

〔平上上〕注記

おほし(といふ) 1027 訓(傍注に「多也」)・毘(我ヲホシ

テフ)・高貞(同上)

ながし(てふ) 1015

毘・高貞

〔平上〇〕

をほし(といふ) 1027 永(墨点)

終止形では○○●型の例のみだが、他の活用形に高起式があり、●●●型の存在を推定できる。また連用形に「如く」(へ上平平)があり、終止形●●●型の存在を推定できる。

1027の「毘」には、「欲」。(頭注)。「ワレヲハホシキカト云也」(注)があり、「我を・欲して」に収めたいところだが、助詞の「を」は上声であってほしいし、また「欲し」にのみ差声しそうなものであるところから、「多し」に含めておいた。「し」の去声は上声の誤写と考える。「永」の墨声点も、同様にここに含めた。

(ii) シク活用のもの

へ上上上 注記

悲し(も) 819

へ上上上 注記

空し(けふりを) 1028

へ上上上 注記

怪し(と) 994

苦し

へ上上上 注記

美し(をとめ)

賢し(因)

へ上上上 注記

同じ(をに)

シク活用では金田一氏の認定された「少し」○○●●型はなく、終止形は●●●型、○○●●型の二種類である。この中で問題なのは

頭天平(へ上上) 568 \*

毘[後] \* 毘

訓(へ平)

毘・高貞(へ平)

頭天平 568 \*

頭天平 568 \*

は「同じ」の(へ上平平)である。古今集に差声例はないが、「名義」諸本・「御巫本(日本書紀)私記」・「四座」や、定家仮名遣などから(へ上平上)と注記してほしいところである。しかもこの

頭陌本の書写は声点も正確で、「頭輔卿云々」の頭書も有する善本である。恐らくは書写の人がこの語に関しては既に(へ上平上)から(へ上平平)の変化を遂げているために、自身のアクセントを誤って記入してしまったと考えたい。「同じ」はこのまま連体修飾となるものが多く、一般の形容詞の終止形と異なるために、他の形容詞にさきかけて(へ上平上)から(へ上平平)の変化をとげたものと思う。「袖」巻廿(鎌倉期書写)の墨声点に「善哉善小男」(へ上平上)・「善哉善小女」(へ上平上)とあり、これも同様の

変化と思う。「毘」は「うまし(をとめ)・さかし」ともに(へ上平上)だが、発音本は「尊恵」が「さかし」に(へ上平平)と変化後の声を差し、「天恵」は相伝と当時のアクセントと異なることを意識してか(へ上平平)を注記するのは面白い。「さかしら」は「頭天片」が低平型であるのに、「梅・清声・清聞」が変化型高平型を注記することも、これと関連する。

(2) 連用形

(i) シク活用のもの

へ上上上 注記

淳く(して) [33]

へ上上上 注記

間無く 上上平

伏片 1070

頭府

家 923

上上○ 923

伏片 1070

家 923

《平上平》注記

上平平 923 伏片(ゝも)平

甚く 893 昆・高貞

白く 1007 昆・高貞

高く 1056 訓

弛く 623 京秘(あし〜くるとは足編来とかけり)

妬く 486 昆・高貞

早く 昆・高貞 856、梅 853。

《上平平》注記

ことく 578 京秘(「く」の声は平軽の位置)

「たゆく」は「京秘」のみ「足・たゆく」と解したが、同じ頃連濁して発音された例が多い。

あしだゆく 《平上平》 昆・高貞・訓・梅

／だゆく 《平上平》 京秘(ゝとよむ人もあり)

五拍語の連用形○○○型とすることも可能であり、古くは二語だったが鎌倉期ではすでに連濁した形が優勢となり両様によまれたと考えたい。

尚、「イタクナナキソ」196に「訓」は《平上平上平》を差す。「解脱」にも「甚く」は《平上平》とあり、なぜ「夕」が平声か疑問とする。

「間無く」は「間」が上声、「無く」が《上平》であるから《上上平》はそのまま複合した型である。「伏片」の《上上平》は複合が強くなった形であろうか。「伏片」と「家」の声点は片仮名本と平仮名本の差はあるが殆どが同じ声点を示す。だが一方が他

方から移点したのではない。以上、ク活用では●●●、○○●、○○○の三型の存在が確認できた。

(ii) シク活用のもの

《平上上平》注記

涼しく 170 昆

久しく 顕天平 568 \*

シク活用は低起式の○○●型のみであるが、古今集の「むなし」《上上上平》、「わびしき」《上上○○》や、「高本名義」(22オ)の「ムナシク」《上上上上平》などから、《上上上上平》●●●●型の存在を推定できる。

(3) 連体形

(i) ク活用のもの

《上上上上》注記

浅き(心) 764 訓

暗き(やや〜) 154 伏片

難き(〜ものと) 765 梅・(清声・清聞も同)

《平上上上》注記

高き(〜やに) 顕府(12) \*

猛き(〜ものふの) (4) 顕府

近き(〜まもの) 1003 顕天片

長き(〜いのちの) 顕天平 568 \*

古き(〜やまとまひの) 1070。 顕天片・顕大

このほか、「後拾」(四)では「深き」《平上上》、「袖」では「軽き」《上上上上》、「多き」《平上上上》などに差声がある。以上、ク活用



は末尾の拍はすべて上声であり、高起式はまだ●●○型の変化をとげてないことから、●●○型、○○●型の二種類と假定でき

(ii) シク活用のもの

〈上上○○〉注記

佗しき(〜はるかすみ) 108 伏片(「伏片」) 315 「わびしき」<sup>(25)</sup>

は高平型)

〈平平平上〉注記

正しき(〜を) ②

樂しき(〜を) 1069

〔木〕との懸詞)

正しき(〜ものならば) 374 訓  
未しき(〜ほどの) 138 毘

顯天片・顯大・訓・(永は○  
○平上。墨点)

「図本名義」278などにおける「少しき」〈平上平平〉のような型はみられない。このほか、「毘」185「悲しき(ものと)」に〈平○○〉があるが、「悲し」は高起式の語で不審である。「袖」十五の「カナシキ(コロカ)」「万葉<sup>3351</sup>」は「愛しい」の意だが〈上平○○〉の声点が差される。「前本・図本雄略紀」の「よろしき」〈上上上平〉の〈平〉は平声軽の誤点と考えられ、「かなしき」も●●○型ととりたところであるが、この語に限ってなぜ「ナ」に平声が移点されるのか。「毘」は〈○○上○○〉の、「袖」は〈上○○上〉の誤写だとしても、そこには何か誤写しやすい要因がかくされてはいないか。シク活用の高起式は稀で、〈平平平

上〉と混同しかかったが高起式は保ちたかった、ために〈上平平上〉のような誤写をしかかったということも考えられる。

なお、「永」(全形仮名)の部分加点は、懸詞の「木」〈平〉のようには発音しないという指示か、或いは「樂しき」とある写本からの移点かは明らかでないが、初めから部分加点であっても〈上上上〉ではないことは示し得るわけである。奥村氏が「天恵・尊恵」④の「空しき(名のろ)」〈○○上平〉の例をあげて「中世前期頃には既に或程度●↓○の動きが認められる」例にされたのは、堯憲本を鎌倉期の写本と誤認されたことであろう。

(4) 已然形

(i) ク活用のもの

〈上上上平〉注記

難けれ(は) 451 伏片・家

やよけれ(は) 1003 顯天片・伏片・高嘉・京中・寂・毘・梅

〈平平○○〉注記

寒けれ(は) 316 伏片

高起式は●●○型ととってよ。低起式ではこの他、「浄本拾遺」「早けれ」413には〈平平上平○○〉があり、「解脱」「強けれ」に〈平上○○○○〉がある。「伏片」の声点からは低起式は○○●○型としてよさそうに思う。

#### 四、四拍語

終止形が四拍の形容詞としては、次の十六語に声点の注記がみ

られる。

あさまし、文無し、行き憂し、いぶせし、憂はし、日長し、木高し、すさまじ、術無し、つき無し、のどけし、はかなし、珍らし、めでたし、物憂し、わり無し

古今集の語例は少ないが、顕昭本では「散」に「汚なし・暇無し」の二語、「後拾」に「うるはし」の一語、「袖」には「うるはし・おほほし・こちたし・さがなし・にげなし・たのもし・まがなし」等がある。「浄本拾遺」には「あやなし・いぶせし・かしこし・ちひさし・のとけし」の五語がある。「四座」には六語があるが、活用形は揃わず、金田一氏により推定のア型が出されている。四拍語は語例も少ないので、顕昭注の諸本も加え、活用形を声点注記形で一括して用例を掲げることにする。

(i)ク活用のもの

高起式

〈上上上上〉

(終止) 行き憂し 388 訓 (〜と) 平

〈上上上上平〉

(終止) あや無し 41 訓

(連用) わり無く(も) 570 昆・高貞・訓

〈上上〇〇〉

(終止) 術なし 1087 寂

低起式

〈平平平上〉

(終止) あや無し 41 昆

(連体) 汚なき

散 403

こちたき

袖(巻五。朱点)

〈平上上上〉

(終止) 術無し 1087

永(墨点)・訓(凶本名義 302 も同)

〈平上〇〇〉

(終止) 術無し 1087

顕天片・顕大・昆・高貞

〈平平上上平〉

(連用) あや無く 229 寂(伏片は〇〇〇平)

いぶせく(も) 109 顕府・伏片・家

木だかく 384(「小高く」との懸詞)

伏片・昆(寂は〇平〇〇)

さかなく 袖(巻十七。朱点)

〈〇平上上平〉

(連用) けながく(し) 顕府 386\*

〈平平〇〇〉

(終止) あや無し 41 寂・京秘

(連体) めでたき 71 伏片

(連用) あやなく 476 昆・高貞

いとなく 散 358

〈〇平〇平〉

(連用) はかなく 586 昆・高貞

(ii)シク活用のもの

高起式(終止形(上上上上)の語例なし)

〈上上上上上〉

〈連体〉ほこらしき 1003 毘

〈上上上上〇〇〉

〈連体〉ほこらしき 1003 伏片・梅

低起式(終止形(平平平上))の語例なし)

〈〇〇平上〉

(終止)浅まし(や) 1050 永(墨点)

〈平平平平上〉

(連体)うるはしき 後拾(49)

うれはしき 1027 毘・高貞・訓・梅・(永(墨点))は〇

〇〇平上)

おほしき 袖(巻二) 朱点)

〈〇〇〇平〇〉

(連体)珍らしき 寂 986 \* (毘・高貞)の「めづらし

げ」600は低平型)

ク活用の終止形で問題となるのは「すべなし」である。「永・訓」は「図本名義」と同様〈平平平上〉で、これはまだ、二語の連結の声点である。「術」は「前本仁徳紀・雄略紀」が〈平上〉で〇型であり、間に助詞が入って多用されることなどから、複合形の〇〇〇型にはなりにくかった。「寂」の「すべなし」は〈上上〇〇〉注記で、この語は「寂」1001にも「せむすべなみ」に〈〇〇上上上平〉が差されていて、「訓・梅」と異なる。また「毘・高貞」は「ス」の部分のみ声点を注記しない。「寂」の声点は「せむすべなし」の〈上上上上上平〉型から、単独でも「すべなし」を高起式ととったものか。なお、「すべなさ」は「毘・高貞」

655

で〈平平上上〉であるが、これは一語となった〈平平上平〉からできたであろうと以前書いた。<sup>(28)</sup>

高起式では「浄本拾遺」16に「あやなし體」〈上上上上上〇〉があり、「訓」の「行き憂し」〈上上上上上平〉、「あや無し」〈上上上上上平〉の両形注記は、●●●●型から●●●●型への変遷を示すと見るべきか。高起式連体形はないが終止形と同型とみてよく、連用形は●●●●型。(尚「あやなし」は七(3)参照)

低起式は、終止形・連体形とも〈平平平上〉で〇〇〇〇型、連用形は〈平平上平〉で〇〇〇〇型とみてよい。

シク活用の終止形は高起式ではみられないが、連体形の〈上上上上上上〉注記(恐らくは●●●●●型)からおして〈上上上上上上〉(●●●●●型)であろう。低起式は終止形は〈平平平上〉で〇〇〇〇型、連体形は〇〇〇〇〇型とみてよい。「袖」に「タノモン」(巻十一) 墨点)〈平平平平上〉とあるのは、平安期に多い語幹的用法で、「シ」の〈平〉は平声輕の誤写ではなく、〇〇〇〇型とみてよいだろう。

### 五、五・六拍語

終止形が五拍語以上のものは次の七語に声点の注記がみられる。

足だ(た)ゆし、いときなし、長長し、かしかまし、物悲し、  
\*物淋し(六語) うしろめたし(二語)

五拍語もまた例が少ないので、四拍語に準じて用例を掲げておく。

(i)ク活用のもの

〈上上上上上〉

(連体) いときなき 957。

梅

〈上上上上平〉

(連体) いときなき 957。

訓

〈〇上上上上〉

(連体) いときなき 957。

寂 [「なき」でとるか↓「資」]

〈平平平上平〉

(連用) あしだゆく 623

昆・高貞・京秘・訓・梅

あしたゆく 623

京秘 (↓「資」)

はしたなう (て) 袖 (巻五) 朱点

(ii)シク活用のもの

〈平平平平上〉

(終止) かしまし 1016

梅 (清声・清聞も)

〈平平平平上平〉

(連用) なまめかしう

袖 (巻五) 朱点

〈平平〇〇〇〇〉

(連用) をさをさしく 1003

顕天片・寂

〈平上〇〇〇〇〉

(連用) をさをさしく 1003

梅 (清声・清聞も)

〈〇〇平平〇〇〉

(連用) ものがなしく (て) 970。

昆・高貞・寂 (墨点) は

ク活用の「いときなき」は二語の連続である

〈上上上上上〉

「か」に平のみ

●

●●●●型から、一語の〈上上上上上〉●●●●●●●●型になり、

〈上上上上平〉●●●●●●●●型にも発音されるようになったものだらう。

低起式は連用形の〈平平平上平〉〇〇〇〇●●●●型から推定すれば

終止形・連体形は〈平平平上上〉〇〇〇〇●●●●型であらう。「京秘」

は「足・たゆく」の二語連続のアクセント型ととるべきかもしれない。

後に複合して連濁したものだらう。

シク活用は連用形〈平平平上平〉〇〇〇〇●●●●型から推定すれば、終止形は〇〇〇〇●●●●●●●●●●型であつたらう。

「をさをさしく」に「梅」〈平上〇〇〇〇〇〇〇〉があるが、「長」

の「ア」は不明。他には一括して掲げたカリ活用に「ものさびしかる」

〈〇〇平上上上〉昆・高貞 944 がある。六拍語では次の一語のみ

だが、語幹形に「おぼづかなみ」〈平平平平上上〉顕天片 476 \* がある。低起式のみ。

(連用) うしろめたく (も) 237 平平平平上平 (平) 昆

〇〇〇〇平上上 (上) 伏片

六、カリ活用 付古未然形

(1)二拍十二拍形容詞のもの (十は接合・複合とも)

a 〈平上上上上〉

起き憂かり (ける) 575 昆・高貞

もの憂かる (ねに) 15 家・訓

いと無かる (らむ) 805 高嘉・伊・京中・寂 (朱点) ・梅

〔最流〕との懸詞) 昆・高貞 (「か」は双点)

a' <○○○平上>

つき無かり(けり) 1048 「月無」との懸詞) 毘・高貞<sup>↑</sup>

b <平平上平平>

もの憂かる(ねに) 15 寂、毘 <○○上平平>

c <平平去○○>

いとなかる(らむ) 805 永(朱点)

d <上平去>

いとな 805 寂(aの傍注「イトナ 清」に墨点)

なお、「浄本拾遺」心濃かる<sup>218</sup>「心焦がる」との懸詞)に <平平上平上> がある、aと付合する。

aには高い部分が二か所に分かれていて、金田一氏の指摘されたようにいかにも「…憂くあり」「…無くあり」の二語の連続のようである。「四座」ではこの類の末の拍が低くて、二拍語では

●○○型、四拍語では○○●○○型とされたが、古今集の場合はこれより古く●○○型及び○○●○○型とできそう、それから

間もなく「無かり(せば)」の●○○型、b「もの憂かる(ねに)」の○○●○○型に変化したものと思う。「いと」の部分は「暇」

が<平平平>、「最」が<上平>、「いとなむ」が「観本・高本名義」で<平平上平>であるから、「寂」の傍注墨声点のみが「最」で

他は「暇無し」と解したことがわかる。「清声」の<上平上平平>は、「最無」を注記したと思うが、平平上平の変化型が誤って

記入された可能性もある。

最も古いのはcdで、「な」に去声が差されることから○○●○○型及び●○○●○○型ではなかったか。「寂」は弘安元年(一

二七八)奥書の加注本で、井上宗雄氏によれば正和(一三二二)一三二七頃には「七、八十歳であつたらし」<sup>32)</sup>寂恵は相伝の a

<平平上平上>を記載したが、清輔本と校合した際に傍注にd<上平去>を書き入れたものと思う。寂恵自身のアクセントは、b「もの憂かる」の<平平上平平>から考えて、すでに●○○型に変化

していたものである。左の例などから考えて、二拍形容詞カリ活用の未然・連用・連体形は、院政期から鎌倉末にかけて●○○

型V●○○型V●○○型の変化を遂げたものと思う。

良からず

<去平○○> 観本名義 67 (35オ) 81 (42オ)・鎮本名義

III 71ウ

<去平上平> 乾元本日本紀私記<sup>33)</sup>一三四・3

良からむや

<去平平上上> 観本名義 41 (22オ)

<去平平○○> 高本名義 79ウ

前記のような四拍語形容詞の場合も、後部成案の形容詞語頭が●型を残す場合は、○○●○○型であったことが予想され、○○●○○型から複合の強い○○●○○型に次第に吸収されていったことが予想される。

(2)三拍語形容詞

(1)ク活用のも

(ひと)にくから(ぬ) 631 <○○上上○○>寂

ひとにくから(ぬ) 631 <○○上上平上>毘・高貞・訓

この他、「散」46に「たけからぬ(みに)」<上平上平上>があ

る。「憎し」は低起式であるから、「寂」は「人・憎からぬ」●○○○○○型であり、「昆」等は「人憎し」が複合して「人憎からぬ」●●●●●○型の声点を注記したものであったろう。<sup>34)</sup>高起式の例はないが、「四座」の●●○○○型と同じと考えてよからう。尚、室町以降の文献では、「あやしかりけり」<sup>35)</sup>に「清聞」が〈平平○○○○〉型を、「おほかる」<sup>22)</sup>に「尊恵」が〈平上平平〉、「天恵」が〈平上○○〉を注記する。

このほか、「寒かるらし」の縮約形「さむからし」<sup>19)</sup>に、「永」〈平上上上平〉(朱点)、「昆」〈○○平平平〉のような声点がみられる。右は恐らく「さむかるらし」〈平上平上平〉が二語意識から一語の意識と変って、「永」の○○●●●●型や、「昆」の○○●●●●型となったものと考えられる。

(iii) シク活用のもの

これには完全な差声の形がみられない。「かなしからまし」<sup>387)</sup> 昆〈○○○○平上平〉は「悲し」が高起式であるから●●●●○○○型を注記したものであろう。

「親しかりしも」<sup>1)</sup> 伏片・家〈○○○○平上上〉は、「親し」が低起式であることから○○●●○○○型を注記したものである。

右の三本はともに全形仮名書きであるが「昆」はともかく、「伏片」等は漢字表記のものからの移点とは考えにくい。形容詞の部分のアクセントは自明のことであったため差声されなかったものだろう。

(3) 四拍語・五拍語形容詞

ク活用

のどけから(まし) 53 〈平上上○○〉京秘

シク活用

すさまじかり(ければ) <sup>13)</sup> 〈○○○○上平平〉寂

ものさびしかる(事) <sup>94)</sup> 〈○○平上上平上〉昆・高貞

四拍語低起式ク活用は○○●○○○型、シク活用は「すさまじ」が名義抄などで〈平上平上〉であることから○○○○●○○○型でよからう。

「物淋しかる」を「物淋し」の複合ととったが、「物・淋し」と二語とすることもできる。ただ、いずれにしても、○○○(・)○○●●型が予想されるのだが、ここでは○○○(・)○○●●●●型となっているのは不審である。

(4) 古未然形

三拍以上の古い未然形としては左の一例のみである。

(こと)の(し)げむ <sup>702)</sup> 平上上平 昆・高貞

平上平平 訓

七、語幹形

古今集には、「あな憂」のように語幹の形で用いられたり、接尾語「み」を伴って「無み」の形で用いられたりすることが多く、そこに差声される場合も多くみられる。以下、形容詞の拍数別に検討してゆく。

(1) 終止形が二拍のもの

(i) 接尾語「み」がつく形

ここには「無み」「良み」の二語があり、前者は、「せむかたなみ」1023・「せむすべなみに」1001・「つきなみ」1029・「よるべなみ」619のように続くものも多く、その中には前部と複合したアを示すものもあるが、便宜上ここでまとめた。

「無み」「良み」はすでに「で」触れたように「寂」に「去平」が  
あつて古くは●○型と思われるが、次のような例がある。

〈去平〉注記

「無み」

よるへなみ 上上上去平 619 寂(頭注に墨点)

〈上平〉注記

「良み」226

伏片

「(…を)無み」 寂 609・昆 497・高貞 497・訓 497・梅 600

「…無み」

あしべなみ

上上平?

顯天平 533\*

よるべなみ 619

上上平?

永(朱点)・寂(朱点)

せむかたなみ(そ) 1023

上上上平?

永(墨点)・寂・訓・梅(清声・清聞も)

せむすべなみ(に) 1001

上上上平?

訓

上上○上?

上上○上?

昆・高貞

つきなみ 1029

○上上?

寂

「月無み」との懸詞

平平?

昆・高貞

平平○平

永(墨点)

永(墨点)

永(墨点)

平平○平

永(墨点)

〈平平〉注記

つきなみ 1029 「月無み」との懸詞 平平? 訓

○上上? 伏片

よるべなみ 619

上上平?

伏片・家

せむかたなみ(そ) 1023

○上上? 昆

〈上上〉注記

せむすべなみ(に) 1001

○上上?

梅(清声・清聞は○)

○平平?

「寂」の頭注以外は殆ど「上平」となった。1029の「つきなみ」は「月」〈平平〉「無み」〈上上〉ともとれるが、「付き無み」〈平平上平〉が規則的な型と考え、一応ここに含めた。「…無み」の部分が〈平平〉や〈上上〉となるのは、よほど複合の強い形であろうか。

「せむすべなみ」の「訓」は、「すべなし」〈平上上平〉から考へると、「せむ」〈上上〉+「すべ無み」〈平平上平〉の複合であろう。「寂」の場合は、「すべなし」が〈上上○○〉であり、「せむすべなみ」が〈○○上上上平〉であることは、「せむすべなみ」「せむすべなみ」いずれの複合も可能となる。「せむかたなみ」は「せむ方」〈上上上上平〉+「無み」〈上上平〉の複合とみる。「よるべなみ」は古くは●●●○型<sup>36</sup>であったと思われる。

(iii) 単独の形

これは全例が「あな憂」のみで、そのうち、〈平平上〉注記の系統、〈○○上〉注記の系統に次に分かれている。(i)から想像すると古くは●型で、後に●型になったと考えられる。尚、426「あな憂、目に」は物名の「梅」を隠し、949「あな憂のはなの」で「卯の花」との懸詞、936「あな憂」、897「あな憂と」、943「あな

憂とや」の用法である。

〈平上平〉注記

伏片家寂(「あ」は欠点) 〇〇上平〇 〇〇上平〇 〇〇上平〇

問答

このはなの 毘・高貞

とや 943 毘・高貞 〇と 897・〇とや 943 梅

高貞 936 (毘は紙脱落)

〈〇〇上〉注記

高嘉・伊・京中(天恵・清声・清聞も同)

京秘\*・梅(広大本も同)

永 949 (墨点。936は「あなう」(朱点)だが「あなう」の誤写か)

右で言えることは、「あなうめに」426では、顕昭本が〈平上平上〉を差声するのに対し、定家の伝授では〈〇〇上平〇〉である。すべて「う」が上声であることに変わりはないが、定家本で「憂、目」の二字にのみ差声されたのは、物名の「梅」〈上上〉の「ア」で読まないことを示せばよかったのである。それは、同じく物名「おきひ」で他本が「おきひむ」に〈平上平上〉を差すのに対し、「高嘉・京中」という定家本及びその系統が〈平上平上〇〉の、重なる部分だけを差声する(436「うひにそ」なども同じ)のと同様の発想である。

(2) 終止形が三拍のもの

(i) 接尾語「み」がつく形

〈上上平〉注記

粗み(鏡を) 758 毘・高貞・寂・訓

薄み(ぬきを) 23 寂

重み(末を) 891・(露を) 694 訓 694 891 (上上平)、梅 891 (清声・清聞も)

清み(水) 304・(底) 666 毘 304・訓 666・(毘・高貞 666は 上上平)

〈平上平〉注記

あらみ(板間) 1002 毘・高貞・訓

いたみ(風を) 〇〇 顕府・伏片は(平〇〇〇)

清み(水) 304 訓

寒み(…を) 伏片 211・毘 211 663・高貞 663・訓 211 416 781

高み(梢を) 579 寂・毘・高貞

早み(…なり) 785 訓

弱み(緒を) 顕天平 568\*

〈平上平〉注記

清み(底) 666 寂

寒み(…を) 寂 211 416 781・毘 416

右のように、高起式では〈上上平〉、低起式では〈平上平〉が一般であるが、例外があり、諸本によって注記にかたよりがみられる。例えば「寂」では、低起式五例中、四例が〈平上平〉注記である。「寂」は、声点本諸本の声点も移点するが、寂恵自身の「ア」を差声することが多いことがその原因であろう。体言の「浅み(こそ)」618は「訓・梅」ともに〈上上平〉注記であり、低起式の動詞は低平型の体言を作る。「寂」の低平型は、既にその頃「…を



ゝみ」の用法がはやらなくなり、多用する体言のアと混同したためであろう。奥村三雄氏は、「清み(666寂)・寒み(416寂・昆)」「平平平」のような「低平型表記は、概ね古今集や拾遺集の声点本に限られ」として、「浄本拾遺」の「繁み小枝」<sup>120</sup>の例を示された。然し、この「そかきくのしげみさえたの色のてこらさ」の場合、解釈面からも「繁み小枝」は複合語と考えてはいかがが。「さ」+●●型は高平型となるのが多く、複合形式からいって○●●●型は比較的安定した型であり、当時の「…をゝみ」は一般にまだ○●●●型だったと考えたい。

(ii)接尾語「み」のつかぬ形

語幹単独で用いられるものに「如」がある。これは大部分がへ上平注記であるが、諸本により解釈及び清濁に問題のあるため別稿とする。他には左のみ。

〈平平〉注記

(身を)早(ながら) 1000 訓(へ上上上)、昆・高貞(へ上) ○○、永(朱点)、寂

〈平上〉注記

(いと)早(も) 209 へ平 昆(尊恵・天恵も同。伏片 ○  
上平) へ○ 高嘉・伊・京中・寂・梅(清聞  
も)

(3)終止形が四拍以上のもの

「つきなみ・せむすべなみ」を「無み」に送ったので、ここでは左の五語である。このうち「いやはかな(にも)」は形容動詞の

用法だが、「はかなし」との関連から、一応ここに含めておいた。

(i)接尾語「み」がつく形

平平上平(夢を) はかなみ 伏片<sup>47</sup>、訓<sup>644</sup>  
○○上上平(名を) むつましみ<sup>228</sup> 伏片(へ上上上上上平)  
平平平平上上 おぼつかなみ(の) 顕天平<sup>476</sup>\*

四拍語では、終止形がク活用低起式のもの(へ上上上平)になり、高起式のもの(例はないがへ上上上上平)にならう。シク活用では高起式のもの(へ上上上上上平)となり、低起式の例はないが「袖」(巻三)に「うるはしみ」(へ上上上上上平)があるから、これが一般であろう。「むつましみ」は、「むつまし(き)」が「凶本名義」<sup>34</sup>、「御巫本私記」その他でへ上上上上平注記であり、「むつ」と<sup>1015</sup>が「昆・高貞」でへ上上上上平であるから、へ上上上上上平と推定される。六拍語は一例故不問とする。

(ii)接尾語「み」のつかぬ形

ここでは次の二例のみである。

「あやな(へ)なきそ」<sup>123</sup>・「わかかは(へ)」<sup>549</sup>

上上上上<sup>123</sup> 伏片・寂・訓・梅

平平上<sup>549</sup> 昆・高貞

平上上<sup>123</sup> 昆

「いやはかな(にも)」

○○上上平(○○) 寂(644は○○上○○○○)

○○上上上(上平) <sup>47</sup> 伏片

上上上上(○○) <sup>644</sup> 昆・高貞

上上上上(上平) <sup>644</sup> 訓

「あやなし・あやなく」は「寂・毘・高貞・京秘」が低起式で、「訓」及び「浄本拾遺」が高起式である。「文」は「前本和名・図本名義」等、〈平平〉であり、「文目」は古今集諸本（「訓」は差声なし）が〈平平平〉である。高起式は異なった語源（例えば「あやふし・あやにく」は高起式）のものと同様にして、両様のアが生まれたかと思われる。

「いやはかな」は「はかなみ」が「伏片・訓」で〈平平上平〉であり、「はかなし」が「観本名義」僧上2（2ウ。色形他と異なる）・60（31ウ）で〈平平〇〇〉であることから、低起式形容詞である。それが、「いや」へ上上と複合して「上上上上」と変化しているところから、既に「いや・はかな」ではなく「いやは（は）がな」ととるべきだろう。「訓」以外は連濁していることもそれを裏付ける。「いや……」の複合が早くから強かったことは、「万葉312」に「伊夜射可里久母」の連濁形があり、「名義」に「いやめづら」へ上上上上平（観本僧上138（70ウ）・僧中34（18ウ）等）があることからも分る。「珍らし」は「図本名義」278〈平平平平〉であるから、「いやめづら」の声は複合したアを示している。「いやはかな」の場合、恐らく複合したア型をとった後も、連濁・非連濁両様行なわれていたものだろう。複合アは、高平型の方が新しい型ではなからうか。

## 八、まとめ

一七のアを表示すれば次のようになる。ここでは金田一氏が行なわれた「四座」の推定形の部分を相当数確例で埋めることが

できた。異なるところは、二拍語に去声を認め、●○型から●○型への変化を院政末から鎌倉期に移る具体的な姿としてとらえたことである。また、高起式終止形の末尾の平声注記が稀であることから、まだ降り拍●から低い拍○に移行してない時期に古今集の差声が多くなされたことも分った。相伝の系統をふまえてア型の時期を想定することが必要なことも多少記し得たと思う。

注(1) 「頭昭 後拾遺抄注・頭昭 散木集注 声点注記資料ならびに声点付語彙索引」(「アクセント史資料索引 三」) 参照。

- (2) 右に同じ。
- (3) 「アクセント史資料索引 六」として刊行予定。
- (4) 「古今和歌集声点本の研究 研究篇 上」
- (5) 「研究篇 上」533ペ。
- (6) 「研究篇 上」363ペ。
- (7) 古今集他本及び和名抄・名義抄など辞書類の声点は「研究篇 上」363ペを参照して頂きたい。和名抄は「本(草)云 一名児草夜来」の差声であり、辞書類の声点は、本草関係書が出自かと思われる。
- (8) 「研究篇 上」28ペ・75ペ。
- (9) 「四座講式の研究」362ペ。
- (10) 答者は三位入道(俊成)、問者としては谷山茂氏(「藤原俊成一人と作品」(谷山茂著作集二) 153ペ)が権中納言中山兼宗(或いは内大臣中山忠親 説を出され、片桐洋一氏(和歌古註統集一(天理) 善本叢書解題)は兼宗説に賛同された。また、松野陽一氏(「藤原俊成の研究」399ペ)の九条兼実説の他、秋永はかつて守覚法親王説(「古今問答私見」国文学研究22)をたてた。然し、兼宗の妻は六条家の



重家女であり、兼宗が声点注記本を見る機会もあつたらうから、兼宗説のほうがよいかもしれない。

- (11) 「研究篇 上」207頁など。
- (12) 「研究篇 上」453頁。
- (13) 築島裕氏は「平仮名に声点を加へるやうになつたのは」鎌倉初期、藤原定家の頃から以降のことであつて、或いは定家あたりが、その導入への役を果たしたかも知れないと推測される。「と書かれる。(一)仮名声点の起源と発達」金田一春彦博士古稀記念論文集(一)然し、たび／＼記すよう俊成が答者である「問答」(孤本)や頼昭の「散」は平仮名本に声点注記と覚しく、定家はこれらの差声作業に影響を受けたと思われるので、定家あたりの頃から以降といふことはできない。
- (14) 「四座講式の研究」406頁。
- (15) 奥村三雄「平曲譜本の研究」406頁。
- (16) 「研究篇 上」25頁。
- (17) 「研究篇 上」75頁。
- (18) 「金沢文庫蔵解脫文義聴集記所載の国語アクセントについて」(金沢文庫研究16・9)
- (19) 「四座講式の研究」407頁。
- (20) 「袖中抄」の声点は、写しが鎌倉から近世にわたつており、頼昭差声と後入れとの選別が問題となる。
- (21) 「四座講式の研究」415頁。
- (22) 「研究篇 上」110頁。

(23) 「やまとうた」と『やまとうり』(『国文学研究』87、昭60・10)でこのことすでに書いた。

- (24) 注(18)の8頁。
  - (25) 「研究篇 上」452頁。
  - (26) 「平曲譜本の研究」412頁。
  - (27) 築島氏はこのほか「くらなし(の浜)」「平平平上」112を上げられた。
  - (28) 「研究篇 上」449頁。
  - (29) 「研究篇 上」452頁。
  - (30) 但し、「あやなし霞」は複合名詞と思われる。
  - (31) 「四座講式の研究」408頁。
  - (32) 「中世歌壇史の研究 南北朝期」195頁。
  - (33) 鈴木豊「乾元本『日本書紀』所引『日本紀私記』声点付語彙索引」(『アクセント史資料索引 四』)
  - (34) 「索引篇」290頁下6行「(一)よにし」「(二)は」「(三)ひとよにし」と訂正する。
  - (35) 「四座講式の研究」416頁。
  - (36) 「研究篇 上」455頁参照。
  - (37) 「研究篇 上」369頁参照。
  - (38) 「研究篇 上」455頁。
  - (39) 「平曲譜本の研究」421頁。尚、「サブ」は「サム」の誤り。
- なお、本稿は昭和60年度文部省科学研究費助成による研究の一部である。

寄贈図書 (一) (60年10月)

戦時下の文学

都築久義氏

茨城の文学読本

現代表記辞典

瑠玉集注釋

武部良明氏

四条宮下野集

注釈と研究

吉田 茂氏

柳瀬喜代志氏

四季の俳句

古今鑑賞歳時記

関森勝夫氏

岩瀬利雄氏

中世文学研究の三十年

藤平春男氏